

## 主人公たちのモラル

佐藤英夫

(1)

E. Hemingwayは異常なまでに行動の問題に関心を寄せている。勿論他のあらゆる作家達もそれぞれの方法で行動に関心を寄せている。しかし価値の問題と経験ならびに行為と価値との関係に対するE. Hemingwayの一貫した探求は、自分の物語や小説の主要な特色になっている。特に主人公のきわ立った特性は、その精力的なこと、その勇氣、その自信に満ちた苦樂超越、激しいスポーツに対する過度とも言える程の傾倒である。彼の作品は、肯定的でなく否定的であるとか、全体の構成がむやみに悲觀論的かつ虚無論的であるとか、世に受け入れられる価値に対する組織的な方法の基礎が欠けているとか、見当違いで、くだらないモラルだとしての非難もあるが、それは彼の作品に対して破壊的な批判を造作することになる。E. Hemingwayの道德性に対するこれらの反対的批判の背後には、確かに批評的偏見がつきものであるが、これらの批判は樂觀論と道德的秩序を支持する方向に偏しているように思はれる。がしかし作家が全経験に関心を置くのであるならば、問題はこの経験が我々の希望、もしくは人類の現状によせる我々の願望を反映しているか否かという事ではなく、何等かの形でそれが重要な真実性を扱っているか否かと言う事であろう。仮りにE. Hemingwayの道德的理念が希薄だとするならば、それはその時代の真に重要でない真実性をめぐっている故であり、否定的、悲觀論的である為で

はない。E. Hemingwayの道徳的規範は一定の時代と、社会の特殊な方面にだけじっくりすると言う事を認識する事が先決であろう。例えば家族生活が主題となっている場合、その道徳観の本当の方向を否認するものとして、その道徳がいかにじっくりしないかと言う事を思うべきであると言う見解である。それは物語や小説は、その意味を不当に解釈する事なしに、近代人の中心的な道徳問題に関連させて読む事が出来るからである。彼の道徳観の方向は、いわばLost Generationの置かれた道徳的立場に限定されるべきではない。科学的発見と科学的態度の重圧のもとに、伝統的な19世紀の価値感が崩壊した事から起る全問題をめぐっているものである。19世紀の科学は懐疑主義を受け入れる基礎と、経験主義的方法による価値の問題に対する新しい態度をもち出す事によって、古い価値の破壊を促進した。これらの原理とE. Hemingwayの作品に於ける道徳観とのつながりを知る事が重要な事である。何故ならば、彼の主人公の倫理的態度は一方に於いて深い道徳的懐疑主義に基づいており、他方に於いて価値決定の問題に対する厳密に経験的な方法の効力に対する確信に基づいているからである。人生に対するこの態度は、E. Hemingwayによって描かれる兵士、獵人、国外逃亡者の経験に十分に現われているだけでなく、E. Hemingwayの小説は直接的に、生々しく現代の性格を反映している。その道徳的不安定と暴力、破壊、破壊の脅威の経験、彼の作品はこの背景をもとに、価値決定をなし、それをテストする為に現代の精神を最もよく示す経験の領域を追求すべき個人を並び、その個人を通じて行動と価値の問題を展望させているのである。作者が現代の道徳的境遇の性格をよく暗示する経験の領域に於いて、そのテーマを発展させる事を目指す故に人生の理念が薄弱であるという事はありえない。このような見方からすると、E. Hemingwayの道徳観は、家庭生活や、仕事と言うような経験の領域を超越する事になる。

何故ならこうした道徳問題がさまざまな形で家庭や仕事に反映されてい

るとしても、これらの領域はある意味に於いて、より大きな道徳的境遇に包摂され、その意味でも E. Hemingway のテーマの主題としては余り役に立たないからである。

## (2)

この事がいかに正しいかと言う事が Soldier's Home<sup>1)</sup> に力強く示されている。主人公クレップスは若い帰還兵で、古い価値に対する彼の信頼感は戦闘の経験によって破壊されていた。しかし途方にくれた彼の両親は、その古い価値を彼に認めさせようとする。因習的な小さな町の市民として生活を再建する事をクレップスに望む両親の願望にひそむ古い価値感、それは巨大な道徳的混乱の苦難にあえぐ社会によってもたらされた問題に、両親と同様に行動することを強いるようなものである。そこから発生する葛藤には解決の方法もなく、クレップスは自分に提供される価値を受け入れる事も出来なかった。彼が家族間の道徳の範囲内で、価値の再適応を実現する事は疑いの余地もないのであるが、しかし人々はその小説の終った先を考えて、彼は E. Hemingway の他の主人公のように、古い価値感を失った地点、既ち行動の世界、恐らくは暴力の世界に於いて、新しい価値感の追求に駆り立てられるに違いない。クレップスの反逆は、公然たる行動の形をとらなかったが、これはすべての E. Hemingway の主人公に共通な態度から起っているのである。

彼等は伝統的な道徳的態度に依存する社会、及びその社会の本来の性格を表現しなくなった信仰に対して反逆するのである。E. Hemingway の主人公は伝統的価値の中に道徳的真実性を見出す事が出来ないので、従って伝統的価値の窮極性を拒否するのである。そしてこの拒否の分枝は価値に対する伝統的態度に対してだけでなく、根本にある原理そのものまで及ぶのである。価値に対するこのような伝統的態度は、健全な価値判断は伝

統的な教訓から引き出される抽象的公式を通じてなされると言う事を信ずる事であろう。価値は絶対と見なされ、感覚でとらえる事の出来る物質界とは無関係な形似上学的実在と考えられる。例えば、神聖という観念は一般的に超感覚的であるとは言え、それ自身現実的存在と見られている。そしてそれが正当に結びつけられるものがその価値性を担うにせよ、神聖は何物にも結びつかない形似上学的実在として存在するものと考えられる。このような論理による価値の表現を E. Hemingway の主人公は徹定的に拒否している。彼の主人公を実用主義者として論じた際、彼は抽象的用語で考える事を拒否するのである。抽象的なものは実際に存在するものを代表しないし又、抽象的なものは、価値の問題を解決する役に立たないからである。そしてこの伝統的な価値の原理をしりぞけるに当って、彼は科学的解釈が近代社会に課した道徳的混乱をよく意識している懐疑的な人々の象徴的な表現に組みして、又そう言う表現を作り出したのである。次はよく引用される A Farewell to Arms の一節であるが、フレデリック・ヘンリーが価値を拒否する方法の根底をなす原理である。若い理想主義的な野戦衛生隊の運転手がフレデリック・ヘンリーに言う。私達がこの夏やった事は無駄に終るはずがない。そしてこの言葉はフレデリック・ヘンリーにそのような理想主義に暗黙のうちにつきまといっている価値性について考えさせるのである。I was always embarrassed by the words sacred, glorious, and sacrifice and the expression in vain. ——and I had seen nothing sacred, and the things that were glorious had no glory and the sacrifices were like the stockyards at Chicago if nothing was done with the meat except to bury it. There were many words that you could not stand to hear and finally only the names of places had dignity. ——Abstract words such as glory, honor, courage, or hallow were obscene beside the concrete names of villages, the numbers of roads, the names of rivers, the numbers of regiments and the dates.<sup>2)</sup> (神聖だ

とか、栄光だとか、犠牲だとか言う言葉や、効なくしてなんて言い廻しには、いつだってぼくは当惑をおぼえるのだ。——しかも神聖なんてものにお目にかかったことはなく、栄光なんてものに栄光のあったためしはない。また犠牲とは、シカゴの屠殺場と似たものであり、その肉を処分せずに埋葬するというちがいがあただけだ。世間にはきくに堪えぬ言葉が多いから、しまいには場所の右だけしか威厳がもてなくなる。——栄光、名誉、勇気、あるいは神聖といった抽象名詞は、村の名、道路の番号、河川の名、連隊の番号、日付けなどの具体名詞と並べると、いかにも猥雑なのだ。<sup>3)</sup>その後フレデリック・ヘンリーは因習的な抽象主義の効能は、それが戦闘行動の規則に移される時、どのように悲惨なものであるかという事を見るのである。超愛国精神にもえる督戦隊は戦争の高い理想主義を裏切った疑いのある将校を逮捕して射殺する。部隊を失って茫然とする将校に督戦隊員は次のように言葉をかける。“It is you and such as you that have let the barbarians onto the sacred soil of the fatherland.” “I beg your pardon,”——“Have you ever been in a retreat?”——“Italy should never retreat.”<sup>4)</sup>(君や君のような輩がおるから、祖国の神聖の土地を野蛮人どもに蹂躪させるようなことになったのだ。失礼だがなんといわれた?——君たちは退却の経験があるのか? イタリアは断じて退却してはならん。<sup>5)</sup>ここに於いてフレデリック・ヘンリーは絶対の価値実在としての神聖に対する伝統的な態度から発生する価値判断は、あるがままの世界には当てはまらない事を知るのである。このような経験によって E. Hemingway の主人公は、見当ちがいの理想主義をまとった道徳的放棄の意味を十分に悟り、そして彼は戦争は結局、社会をひき裂く道徳的分裂の暴力的、表面の現れにすぎないと知るのである。

E. Hemingway 小説の大きなテーマをなすものは、この問題に関連する近代人の苦境である。道徳的繋留索をたち切らせて、漂う E. Hemingway の主人公は、新しい価値方位の発見という大問題と必死に格闘しているよ

うに思はれるのである。そして新しい彼の試みは、しばしば悲劇的な失敗と、痛ましい半ば成功に終るとは言え、彼は強情な個人主義の立場に於いて、あらゆる手段を構じてこの問題に立ち向うのである。彼の目指すものは、価値体系を新しい原理の上に再建することであり、彼の信ずる事の出来ない伝統と完全に絶縁し、知的抽象に存する価値のみを記録するために、深い懐疑主義をもって土台をきれいに掃き清めて、彼の行動の中に新しいモラルを発見しようとするのである。この新しい方法を支配する原理は、心理的なものである。何故ならば、彼は率直に自分を衝動、慾望、選択の動物と見なし、入りくんださまざまな方法で、感情と慾望を満足させるものだけに価値を認めるからである。問題は与えられた価値に対する知的正当化ではなく、個人的反応と個人的態度に基づく正当化である。彼の問題は、最も重要で最も重みのある衝動が、より軽い衝動によってできるだけ挫折されないように複雑な衝動を組織し、まとめる事にあるのである。心理的原理に基づいて、自分の価値態度を再組織しようとするこの試みに於いて、彼は多分余りにも多くのものを拒否し、いわば自力で自らを高めようとする課題を引き受けるので、大きな道徳的意味に於いて、悲劇的に失敗する運命になるのである。しかし E. Hemingway の小説の人物は、他の文学作品中のどの人物よりも意識的に経験の意味をさぐり、新しい価値の方向を身につけるために感情や感覚の意味を殆んど憑かれたもののよう  
に思はれる。価値問題に対するこの態度は E. Hemingway 小説に於いてなぜモラルが常に暗々裏に、そして時には歴然と感情や感性に結びつけられているかについては次の頃で探求して見ることにする。

(3)

The Sun Also Rises のジェーク・バーンズは不道徳とは、—— things that made you disgusted afterward. No, that must be immorality.<sup>6)</sup> (あと

で自分をいやにさせるものは、いやそれは不道德にちがいない。<sup>7)</sup>と定義している。そして同じ思想がDeath in the Afternoonに於いても述べられている。E. Hemingwayは又So far, about morals, I know only that what is moral is what you feel good after and what is immoral is what you feel bad after——<sup>8)</sup>(ところで道德のことだが、現在のところぼくにはやったあとで気持ちがいいのが道德的で、後の気持ちが悪いのが不道德的なことだ。としか思えない。<sup>9)</sup>)と書いている。このような道德的基準によって判断すると、闘牛はそれが行はれている間ずうっと自分を非常に壮快にするので道德的であると言い、又その闘牛が終った時自分を悲しさの中に入れるが、やはり爽快であると言うのである。多分これは幻滅した近代人の反知性主義なのであろうか。しかしそれは一定の立場をもって人生に立ち向う反知性主義、最高の価値とは感情的、もしくは心理的満足を与えるものであると言う観念に基づく反知性主義であるという点に注目すべきである。ジェーク・バーンズは眠れない夜の物思いで、原則は価値の交換であった事を思いつき、これを行為の原則として述べている。You gave up something and got something else. Or you worked for something. You paid some way for everything that was any good. I paid my way into enough things that I liked, so that I had a good time. Either you paid by learning about them, or by experience, or by taking chance, or by money. Enjoying living was learning to get your money's worth and knowing when you had it. You could get your money's worth. The world was a good place to buy in.<sup>10)</sup>(なにかをすてて、なにかをえるのだ。または、なにかを求めて働くのだ。なにか役に立つもののためにとにかく支払うのだ。ぼくは好きなものを充分手にいれるように支払ったので、楽しかったのだ。それらをおぼえたり、経験したり、冒険したり、金を使ったりして、支払うものなのだ。生活を楽しむということは、金に相当する価値のあるものをえることを学び、それをつか

んだときを知ることなのだ。金に相当する価値をえることはできるものだ。世間というものは買物をするのによい場所なのだ。<sup>11)</sup>」とジェーク・バーンズの最後の思いは、行為の問題に関する E. Hemingway の主人公の立場全体を簡潔に述べている。

Perhaps as you went along you did learn something. I did not care what it was all about. All I wanted to know was how to live in.<sup>12)</sup> (たぶん、やっていくうちにになにかをおぼえるのだ。それがどんなことか気にはならない。知りたいのは、そこでどう生きるかということだけだ。<sup>13)</sup>) と。

この言葉はフレデリック・ヘンリーの行為の根底にある観念である。彼は武器にさよならを告げると同時に、古い原理を拒否して、新しい原理を主張するのである。E. Hemingway の主人公はますます政治・経済問題を知的に意識されるようになる証拠として、しばしば言及されるハリー・モーガンにせよ、ロバート・ジョーダンにせよ、根本的には彼等の感情に維持されている価値感に、政治もしくは経済が影響する限りに於いて、彼等はそういう問題に関心を示すにすぎないのである。ハリー・モーガンの行為は、彼の激しい個人主義の価値を守りたいという慾望と、皮肉なことに、そのために殺人、公権喪失を招いてまでも自尊心を満足させたい慾望によって、動機づけられている。ロバート・ジョーダンは政治についても相当考えるけれども、根本的にはハリー・モーガンよりも関心が少ないのである。彼の行為の背後にはスペイン人と、その文化に対する彼の愛、及び彼が知るスペインを存続させるための運動に対する感傷的とも言える反応から生まれる深い感情があるのである。ロバート・ジョーダンは E. Hemingway の主人公の発展に於いて、若いフレデリック・ヘンリーが徹底的に拒否する価値を認める段階を代表している。フレデリック・ヘンリーが拒否する抽象観念の一つである義務の観念をロバート・ジョーダンは今や最高の畏敬をこめて胸にだきしめている様子が次の言葉で理解できる。It was something that you had never known before but that you



had experienced now and you gave such importance to it and the reasons for it that your own death seemed of complete unimportance ; only a thing to be avoided because it would interfere with the performance of your duty.<sup>14)</sup> (それは、それまでまったく知らなかったあるものではあるが、いまではそれを経験し、それに大きな重要性を付与し、十分に理由づけているのだから、おれ自身の死すら、いまは完全に、なんでもなくなってしまうているのだ、死はただ義務の遂行をさまたげるから避けなければならないものであるにすぎない。)<sup>15)</sup> A Farewell to Arms の督戦隊員の態度についてフレデリック・ヘンリーがあのように軽蔑した価値を、ロバート・ジョーダンが受け入れるにしても、これらの判断が作られている経路には途方もない違いがある。フレデリック・ヘンリーは価値を伝統的錯誤と考える一方ロバート・ジョーダンの価値の自覚は、一国民及び彼等の国土との直接的人間的経験から発生するさまざまな感情や愛情の合成から生まれている。それは愛情を通して実現され、経験的方法によってテストされた価値なのである。価値に対する二つの態度の間にあるこうした違いを、更に重要ならしめるものは、これが E. Hemingway の小説の性格描写全体の型を内包しているという事にある。E. Hemingway には二つの基本的種類の人間、つまり勇者と卑法者とが同居している。そして又この二つの分類の根底には重要な原理がひそんでいるのである。即ち E. Hemingway の主人公を単なる口数の少ない、しかも一本調子の頑強な男にしている原理。彼の主人公とその同志に選ばれた人々よりなる閉鎖的秘書社会に加入する資格を与えるもの、及び彼等の行動と性格全体の型を決定するものは、価値に対するある是認された態度である。第一に、E. Hemingway の主人公は過去のあらゆる価値判断を拒否して、行動の世界で知性的でない心理的解釈に基づく新しい価値体系の真剣な探求に乗り出さなければならない。第二に、彼はその行動を彼の個人的な価値結論に基づいて型どり、それを実際生活の試練に、必要とあらば暴力と死という窮

極の試練にさらされなければならない。経験主義者として、彼は目の前にあることを正直に見ることを学び、他人から言われたことでなく、彼の実感を発見して、幻想を払いのけるためにはあらゆる努力を尽すことを学ばなければならない。彼は経験が正直実であると教えるものに直面する勇気を持ち、それに応じて行動しなければならない。ジェイク・バーンズのように本当に大切な価値判断を下すことが下手であるとしても、あるいはフレデリック・ヘンリーのように恋愛の不確定に一切を賭けるにしても、彼は堂々と事態に直面し、人間として可能な範囲ですべての後悔を断たねばならないのである。E. Hemingwayの世界で容れられる人々の価値感はこちらのものであり、これらの基準を貫くことの出来ない者は容れられないのである。容れられる者は、彼等の架空の世界の内部で、価値とは何であるかについて一致するが故に、共通の理解の踏台に立ち、又彼等は同じ価値方位を分有しているが故に、相互に特別な関係を結んで容れられる者、及びその者達が重んずる制度や、支持する社会に強く反対する。こうして「日はまた昇る」のジェイク・バーンズはパリで祭日の列車の中で外国旅行者達や愉快的観光客に対立し、「武器よさらば」のフレデリック・ヘンリーは誤った戦争の理想主義に対立し、「兵士の家」のクレップスは故郷の町の非現実的な道徳に対立し、「持つと持たざるもの」のハリー・モーガンは個人主義を攻撃する社会と対立し、更に「橋を渡って木立の中へ」のリチャード・キャントウェルは仲間と共に偽善者の軍人や無能な將軍並びに凡庸な政治家と対立するのである。彼等は根本的に正常なマンネリズムによって形成されるのではなく、人生に対する基本的見地によって形作られる一種独特な結束が見られるのである。極端な経験主義者にとって、ある種の価値は、基本的仮説の性格をとるものである。行動の生活の中にしばしば暴力的行動の生活の中に価値を求めようとするE. Hemingwayの主人公にとって、技能、知恵及び勇気は根本的必要条件になってくるのである。こうして狩猟の感情的価値を測定するために、「フランス・マ

「コーマーの短い幸福な生活」の中の臆病者のフランシス・マコーマーは狩猟案内人ウィルソンから掟を学び、狩猟人の技能と野獣の知恵と、生命の危険を物ともしない勇気が必要であることを悟り、その過程で男らしい人間になる。しばしば強調されるように、作家にとっては文学的技能が必要であり、将軍にとっては戦略的能力が必要であり、価値を探究しようとする E. Hemingway の主人公にとって技能、知恵、勇気なるものが、完成された猟人にとっても根本的に必要なものになる。経験主義者にとって正直は自己幻想に対する防壁としての価値がある。そして苦楽超越は失敗及び半失敗に対する伝統のない人間の砦なのである。この除け者の古典的原型である The Sun Also Rises のロバート・コーンは価値に対する一般に認められている態度がいかに直接的に E. Hemingway の性格描写を支配しているかを明白にしている。「彼は父がたの家系では、ニューヨークの指折りの金持ちのユダヤ人の家族の一員だったし、母がたの家系では、もっとも古い家柄の一員だった。」<sup>16)</sup>のように立派な家柄に生まれた。そして彼の全生涯は、伝統及び彼に対する支配力を獲得した女の、両者によって決定された型に従った。軍隊式の私立の予備校、大学（プリンストン）、金持ちでやさしくしてくれた最初の女との結婚、5年間にわたる家庭内での厳しい支配、そして更に3年にわたる愛人による支配、など、彼には独立独行の能力がないのである。彼は愛人のすすめに従って、「二人はその貴婦人が教育をうけたヨーロッパに出かけ、3年間過ごした。最初の一年は旅行し、あとの二年はパリで暮した。」<sup>17)</sup>そして「妻（最初の）をすてようと思ったとたん、妻のほうから彼をすて、細密画の絵描きと墮落ちしてしまった。妻と離婚しようとは何ヶ月も考え、やっかいばらいするのもあまりに残酷だろうとがまんしてきたのだから、彼女の家出はショックだったが、気がせいせいした。」<sup>18)</sup>のように卒先して行動を起す事が出来なかったのである。ロバート・コーンは経験の意味をテストするために、経験に立ち向うのではなく、単にその価値に対する先入観をもって、ずるずると生

きるにすぎなかったので、彼は容れられる者の見地からすれば、世界並びに人がその中で買うことの出来る価値に対して間違っただけをいだいていくことになるのである。ジェイクが二人でアフリカに狩に行こうと提案するがロバート・コーンは「いやそいつは気が向かないんだ。……それは、君がまだ本で読んだことがないからだ。<sup>19)</sup>」と言う。ロバート・コーンは意識的に不正直に振舞うからでなく、幻想にさえぎられて現実を見抜くことが出来ないために、自分に対して、又他人に対して正直になることが出来ないのである。例えば、ブレット・アッシュレー夫人に対するジェイク・バーンズとロバート・コーンの評価には相当の違いがある。そしてこの事は経験に対する態度に於いて、容れられる者と容れられない者との間に大きな開きがあることを示していることになる。ジェイク・バーンズはブレット・アッシュレー夫人に惚れているとは言え、彼女のあるがままの現実直面するし、ロバート・コーンは彼女をロマン化する。ロバート・コーンの性格描写に於いて再三、価値に対する彼の馬鹿げた態度が強調される。スペインの田舎をドライブしている時、ビル・ゴートンとジェイク・バーンズが「ぼくたちは出発し、街路を通過して町を出た。いくつかの美しい庭園の前を通り、ふりかえると町はいいながめだった。<sup>20)</sup>」と国土を称讃している間ずっとロバート・コーンは眠っている。ジェイク・バーンズは暴力と邂逅に真剣に何かの意味を求めて闘牛を見に行くのであるが一方ロバート・コーンは退屈するのではないかと思いながら出かけるのである。ブレット・アッシュレーの新しい愛人である闘牛師に会いにでかける時でさえ、彼女を正直な女にするためだと言う。容れられる者は一人として、経験をそのような無益なところに使わない。失敗した時でさえ、彼等は価値の追求の方法について本当に迷うことはない。ジェイク・バーンズとビル・ゴートンとイギリス人は楽しくスペインの田園に対して同様な感情を寄せ、素朴な友情の価値を共有する。ジェイク・バーンズの闘牛に関する経験は、彼にある価値を悟らせるのであるが、それはごく微妙で捕

捉しがたいようなもので、彼は正しく表現することが出来ないように感じているのである。

## (4)

E. Hemingwayにとって容れられる者を決定するのは、いつもこのようなテストであった。経験によって決定された価値に基づいて態度を決め、それに応じて行動することが受け容れられる者の基準であったのである。ブレット・アッシュレー夫人のように本当の価値を見出さなくとも、正しい方法で価値をつかもうと努めていることが理解出来れば親しい仲間に入れてもらえるのである。ヘンリー少佐の友人で軍医のリナルディは老練な軍医としての経験を除いては、完全に感覚の次元で価値を実験する。そして彼はそのことを彼の人生に於いて本当に意味のあることだと思っている。彼の態度は強烈な感情の伴うことをやっている間、思考をしりぞける老練なロバート・ジョーダンの態度と根本的に同じものである。この価値の基準はTo Have and Have NotやFor Whom the Bell Tollsの性格描写に明らかに支配するものである。Across the River and into the Treesの中の二人の人物、キャントウェル及び彼の古い戦友によって設立される想像上のクラブはThe Sun Also Risesに於いて容れられる者同志が結びつくおりに使われる精神的テストの一種の制度化と見なすことが出来るようである。この秘密のグループの仲間に入る者は、経験と、そのグループに対する態度によって適格者と認められてから加入するのである。更に行動と暴力の世界から少し距離を隔てているE. Hemingwayの女性は特別の階級をなしている。つまり彼女達の愛人と同じく、彼女達も因習的な価値判断を拒否して、経験にたよるという態度の立場をとる。しかし彼女達は特殊な点で主人公達と違う面があり、彼女達は男の経験から引き出される实际的結論にたより、こうして容れられる主人公を崇拜し、熱心に彼から学ぶのであ

る。キャサリンの関心はヘンリーにふさわしい妻になることであり、古い道徳的仮説が彼等の牧歌的な恋愛を多岐にしていることに気がつく時彼女は率直にそれを詫びている。マリアも同様にジョーダンの判断を全面的に信頼する。彼女の大きな関心は彼の標準によって、彼のふさわしい妻になることを心かけるのである。

E. Hemingwayの道徳性について、識別力の強い人々には不快を与えるような価値感を持ち、男らしさや、好戦的な逞ましい行動に於いて主張する主人公に対して傲慢だと見る向きもあるが、彼の価値評価のあるもの、つまり価値態度として彼が感情と気持だけにたよること、感覚に対する彼の強調や感覚で触れることが出来るものに対する尊重、更に彼の表面的なマンネリズム等々、彼の価値の問題及び彼が提出した解決はすべて社会の重要な道徳的関心を反映していると見るべきであろう。

彼は人生の実際の闘争の中で価値をテストし、経験のテストが教えるものには堂々と直面し、E. Hemingwayの主人公の常習が常に称讃すべきものでないとする人がいても、行動に於いて常に新しいモラルを発見しようとすることに真剣で徹底的な関心を注いだことは疑いのないことである。

- 注 1) The First 49 Stories (Jonathan Cape) P.122  
2) A Farewell to Arms (Charles Scribner's Sons New York) P.184-185  
3) ヘミングウェイ全集第4巻 (三笠書房) P.147-148  
4) A Farewell to Arms (Jonathan Cape) P.223  
5) ヘミングウェイ全集第4巻 (三笠書房) P.177-178  
6) The Sun Also Rises (Scribners) P.149  
7) ヘミングウェイ全集第3巻 (三笠書房) P.121  
8) Death in the Afternoon (Scribners) P.4  
9) ヘミングウェイ全集第5巻 (三笠書房) P.171  
10) The Sun Also Rises (Scribners) P.148  
11) ヘミングウェイ全集第3巻 (三笠書房) P.120-121  
12) The Sun Also Rises (Scribners) P.148  
13) ヘミングウェイ全集第3巻 (三笠書房) P.121

- 14) For Whom the Bell Tolls (Scribners) P.235
- 15) ヘミングウェイ全集第6巻(三笠書房) P.257
- 16) The Sun Also Rises (Scribners) P.4
- 17) Ibid., P.5
- 18) Ibid., P.4
- 19) Ibid., P.10
- 20) Ibid., P.91

## 参考文献

- 1. アメリカ文学作家シリーズ第一巻(北星堂書店)
- 2. アメリカ文学の展開(北星堂書店)
- 3. 現代作家論「アーネスト・ヘミングウェイ」(早川書房)
- 4. アメリカ文学NO.10. 11(成美堂)
- 5. ヘミングウェイの考え方と生き方(弓書房)